《評論連載》

絵本論を探して……少年は森へ行く（第二回）

灰島　かり

『おかあさんのたんじょう日』

「岩波の子どもの本」の一冊、『おかあさん　だいすき』（訳・編／光吉夏弥、一九五四年、図1）を見てみよう。この絵本は、訳者の光吉夏弥が、二冊の絵本を合わせて一冊に編集したものだ。[注1] 私がとりあげるのは、ここに収められたマージョリー・フラック作『おかあさんのたんじょう日』である。フラックの作品を『おかあさん　だいすき』だとかんちがいするケースが多く、そう思ってもあまり問題はないのだが、いちおう注意しておこう。日本で翻訳刊行されてから長い時間がたっており、翻訳上も、また日本の絵本史の上からも書かなくてはいけないことが多々あるが、それはひとまず措いておき、まず中味を見てみよう。

ダニー少年がお母さんへの贈り物を探していると、動物たちが次々に品物を提案してくれる。だがダニーは断って、ひとりで森へ行き、クマに教えてもらったものをお母さんに贈る、というストーリーが展開する。アメリカでも日本でも幼児向けの古典絵本として、少々古めかしくなりながらも、今でも子どもたちに読まれている。私の目的は、この絵本から「少年が森へ行く」という絵本のひとつの基本構造を見てとりたい、というところにある。

最初の見開きでは、ダニーという名前の男の子が階段に腰かけ、膝に肘をついて考え事をしている（図2）。きょうはお母さんの誕生日なので、ダニーはお祝いに何をあげようか、と考えているところだ。描かれたダニーは、四〜五歳というところか。

ダニーが贈り物をしたいということは、つまりこの子は母親からたくさんの愛情を受けていて（贈り物をもらっていて）、だから今度は自分が母親を喜ばせたい（返礼をしたい）のだろう。マルセル・モースの贈与論[注2]を引くまでもなく、贈与には返礼が伴う。そう思ってダニーの足もとに目を向けると、二輪車のような、引っぱって遊ぶおもちゃが転がっている。これひとつで、ダニーが良いおもちゃを